

# 名馬罪あり

野村胡堂

—

「おっと、待った」

「親分、そいつはいけねえ、先刻——待ったなしで行こうぜ——と言ったのは、親分の方じゃありませんか」

「言ったよ、待ったなしと言ったに相違ないが、そこを切られちゃ、この大石たいせきが皆んな死ぬじゃないか。親分子分の間柄だ、そんな因業いんじょうなことを言わずに、ちよいとこの石を待ってくれ」

「驚いたなア、どうも。捕物にかけちゃ、江戸開府以来の名人と言われた親分だが、碁ごを打たしちゃ、からだらが、ししが、ないぜ」

御用聞の銭形の平次は、子分のガラツ八こと八五郎を相手に、秋の陽ざしの淡い縁側、軒の糸瓜へちまの、怪奇な影法師かげぼうしが揺れる下で、縁台碁えんたいごを打っておりまして。

四世本因坊ほんいんぼうの名人道策どうさくが、日本の囲碁いごを黄金時代に導きみちび、町方にも専ら碁もつぱが行われた頃、丁度今日の麻雀マーじゃんなどのように一時は流行を極めた時分です。

もつとも、平次とガラツ八の碁はほんの真似事で、碁盤ごばんと言っても菓子折の底へ足を付けたほどのもの、それにカキ餅のような心細い石ですから、一石を下す毎に、ポコリポコリと、間の抜けた音がするという代物しろもの、気のいい女房のお静も、小半日この音を聞かされて、縫物ぬいものをしながら、すっかり気を腐くさらしております。

「だらしがないは口が過ぎるぞ、ガラツ八奴、手前てまえなどは、だらしのあるのは碁だけだろう」

平次も少しムツとしました。

「それじゃ、この石を待ってやる代り、何か賭けましよう」

「馬鹿ッ、汚きたない事を言うな、俺は賭事は大嫌いだ」

「金でなきやアいいでしょう、竹籠しっぺいとか、餅菓子とか——」

「よしッ、それ程言うなら、この一番に負けたら、今日一日、お前が親分で俺が子分だ。どんな事を言い付けられても、文句を言わないという事にしたらどうだ」

「そいつは面白いや、あつしが負けたら、打つなり蹴けと飛ばすなり、どうともしておくんなさい。どうせ親分なんかには負けっこがないんだから」

「言ったね、さア来い」

二人は又、怪しげな碁ご器の中の石をガチャガチャ言わせて、果し合い眼で対しました。

「まア、お前さん、そんな約束をなすつて」

お静は見兼ねて声を掛けましたが、

「放つて置け、この野郎、一度うんと取つ締めなきやア癖になる」

平次は一向聞き入れそうもありません。江戸一番の御用聞が、ざるじ 碁碁で半日潰すのですから、まことに天下は泰平と言つたものかもわかりません。

「さア、親分どうです、中が死んで、すみ 隅が死んで、目のあるのは幾つもありませんぜ。——今更征しちようの当りなんか打つたつて追つ付くもんですか」

「フーム」

「降参こうさんなら投げた方が立派ですぜ。この上もがくと、くび 頸をくく縊つて身投げをするようなもので」

「勝手にしろ、——ふんどし 禪を嫌いな男碁は強し——てな、せんりゆうてん 川柳点にある通り、碁の強いのは半間な野郎に限つたものさ」

平次はそう言つて、一と握りの黒石くろを、ガチャリと盤ばんの上へ叩き付けました。御用聞には惜おしい人柄、碁さえ打たなきやア、全く大した男前です。

「へッへッ、何とでも仰つしやいだ、——今日一日あつしが親分で」

「馬鹿野郎」

「親分に向つて馬鹿野郎はないでしょう」

八五郎はそう言いながらも、長い顎あごを撫で廻まわしました。唐棧とうざんを狭く着て、水の刷毛はけ先を左に曲げた、人並の風俗はしておりますが、長い鼻、団栗眼どんぐりまなこ、間伸びのした台詞せりふ、何となく犢鼻褌ふんどしが嫌いといった人柄に見えるから不思議です。

丁度その時でした。

「御免下さいまし、平次親分のお宅はこちらでいらつしやいますか」

切り口上ですが、鈴を鳴らすような美しい声、女房のお静はそれに応じて取次に出た様子です。

「武家の娘だ、が——すっかり顛倒てんどうしているらしいぜ。八親分、こりや飛んだ大きな仕事かも知れないよ」

そんな事を言つて面白そうにガラッ八を顧かえりみました錢形の平次も、なかなか人の悪いところがあります。

二

お静に案内されて通つたのは、十八九の武家風の娘。その頃の人ですから、すっかり訓練されて立居振舞に少しの破綻はたんもありませんが、平次が声を聞いて判断したように、どんな目に逢つて来たものかすつかり怯おびえて、挨拶を済ませると胸を抱いたまま暫くは口もきけないほど昂奮かうふんしております。

「お嬢様、どうなさいました、大層驚いていらつしやる様ですが——」

平次は敷物をすすめて、いたわるように言いしました。お静の若い美しい女房振りや、平次の穏やかな調子は、どんなに相手を慰めたことでしょう。娘は少し落着くと、ほぐれるように、その驚きを話します。

「父上——相沢半之丞と申しますが、大事な書面を紛失してお腹を召そうとなさいます。一応は止めましたが、書面が出て来ない以上は、のめのめと生きてはおられぬと申します。平次様、お願いで御座います、お助け下さいませ」

「相沢半之丞様と仰しやると？」

「大場石見様の用人、牛込見付外に住んでおります」

「フーム」

大場石見というのは、八千石を食<sup>は</sup>んで、旗本中でも家柄、その用人といえ、陪臣<sup>またもの</sup>ながら相当の身分です。

「いつぞや助けて頂いた、小永井浪江様は私の幼友達で御座います。外に頼る

ところもない身の上、どうぞ力になつて下さいまし」

娘はそう言つて、後ろに慎ましく控えたお静の方を、訴えるように見やるの  
でした。

「御武家方の紛紜いざこざに立入るのは筋違いですが、兎も角一応承りましよう」

平次がこう乗り出してくれるともう千人力です。娘はホツとした様子で、語  
り進めました。

牛込見付外の大場石見というのは安祥旗本の押しも押されもせぬ家柄ですが、  
房州の所領に、苛斂誅求かれんちゆうきゆうの訴えがあつたために、若年寄から東照宮の御墨附すみつき—

—大場家の家宝ともいふべき品——を召上げられ、長い間留め置かれましたが、  
領地の騒ぎも納まつたので、一と先ず下げ渡されることになつたのはツイ昨日  
の事。大場石見早速罷り出まかて受取るべき筈のところ、所労のため果し兼ねて、  
越えて今日、用人相沢半之丞を代理として差出し、御墨附を文箱に納めて持ち



歸らせましたが、間違いはその途中、牛込見付外の屋敷へ入ろうという一歩手前に待ち伏せしていたのでした。

相沢半之丞は典型的な用人ですが、劍槍両道にも秀ひいでた立派な武士。この日主人の代理として、御評定所から御墨附を受取って来るについて、まさかテクテク歩くわけにも行かず、そうかといって、陪またもの臣が駕籠に乗るわけにも行きません。

この人の唯一の弱身は、生れ付き馬が嫌いで、もつとも身分柄乗らずに済んだせいもあるでしょう、今までは先ずそのために困った経験もなかったのですが、和田倉門外の御評定所へ行って大事の品を受取って来るとなると、馬で行くのが一番ピタリとします。

幸さいわい、主人、大場石見は大の馬好き、近頃手に入れた『東雲しのめ』という名馬、南部産八寸やきに余る逸物いちもつに、厩中間うまやちゆうげんの黒助という、若い威勢の好い男を附けて貸

してくれました。

相沢半之丞、嫌とも言えず、それに乗って出かけたのが間違いの基もとだったのです。

往きは先ず無事、御評定所で御墨附を受取り、一応懐紙を銜ぶくんで改めた上、持参の文箱に移して御評定所を退き、東雲しののめに跨またがつて、文箱を捧げ加減に、片手たづなでやって来たのは牛込見付です。

見付に出て、神楽坂かぐらを上ると、あとは一と息ですから、ここまで来ると、相沢半之丞思わずホツとしました。何となく気が緩ゆるんだのです。

### 三

「旦那様、悪いものが参りました」

馬丁の黒助は、前へ駆け抜けて、半之丞の乗った栗毛の轡くつわを取りました。

「何だ」

半之丞は御墨附を入れた大事の文箱を、鞍くらの前輪に添くえて確しかと押えたまま、黒助の指さす方を見やります。

成程市ガ谷の方から少しダラダラになった道を来るのは、引越しのガラクタとも見える高荷を積んだ大八車。戸棚を二つも重ねて——いかに電話線のない時代でも、その上へ三間梯子ぼしこを積んだのですから、恰好が浅ましいばかりでなく、車の動くにつれて、グワラグワラと恐ろしい音を立てます。

名馬罪あり



©2017 萩 柚月

「旦那様、体裁ていさいは悪う御座いますが、暫く我慢なすつて下さい、この馬は疝かんが強う御座いますから」

黒助はそう言いながら、法被はっぴを脱いで、馬の首に冠せ、その下から手を入れて、

「ドウドウドウ」

と鼻面たてがみから鬣なだをさすつております。

が、そんな事で宥なだめられる『東雲しののめ』でなかったのか、それともすれ違いざま、梯子の先が馬の尻に触ったのか、馬はパツと棹立さおだちになると、馬丁べっとうの法被はっぴをかなぐり捨てて、奔流ほんりゅうの如く元の道へ。

「ワーツ、ワーツ」

と言う人声、真昼の往来は断ち割ったように二つに裂さけて右往左往に逃まどげ惑まどう中を、僅くらに鞍くらに獅噛しがみ付いた半之丞、必死の手綱を絞りますが何の甲斐まじもあ

りません。

「旦那様、お濠ほりだツ、危あやないツ、降りて下さいッ」

まだ轡くつわを放さなかつた馬丁べっとうの黒助は、張り切つた馬の首の下から必死の声を絞ります。

ヒヨイと見ると、成程ほんば奔馬はもうお濠の崖へ乗出そうとしているではありませんか。

「あッ」

半之丞は本当に必死の思いで飛降りました。イヤ、転げ落ちたと言つた方がよかつたでしょう。大地に抛ほうり出されて、起き上がらぬうちに、狂いに狂つた馬は、二三十尺もあろうと思う崖の下へ、一塊かゐの土の如く落ちて、水音高く沈んでしまつたのです。

「旦那様、お怪我は？」

「おお黒助、文箱ふばこを探してくれ」

「ここに御座います、旦那様」

「有難い、それさえあれば」

落散る文箱を取って差出すと、半之丞押し戴いて立ち上がりました。埃と泥とに、見る影もなく塗まみれておりますが、馬は下手でも、体術の心得が確かなので、幸い大した怪我もなかった様子です。

しかしこの醜しゅうたい体を何時までも往来の人に見せるわけには行きません。半之丞は濠に落ちた馬の始末を黒助に任せて、自分は御墨附の入った文箱を後生大事に、そこからはもう眼と鼻の間の屋敷へ帰って来ました。

屋敷と言ったところで、主君大場石見のお長屋、落馬をした埃ほこりだらけの体で、主君石見の前へ出ることもありません。一応自分の長屋に帰って衣服を改め、髪を撫で付け、さて出かけようとして次の間の机の上に置いた文箱を取り上げ

て驚きました。

「あッ、これは？」

箱は違っているのです。紐ひもの色、高蒔絵たかまきえ、いくらか似てはおりますが、よくよく見ると、まるつきり違った品で、金蒔絵きんまきえで散らした紋も、鷹の羽が何時の間だきみようがにやら抱茗荷ふるになって、嚴重にした筈の封印もありません。

顫ふるう手先に紐を払って、蓋を開けると、中は空っぽ——  
暫くは夢見る心地、何の考えも出て来ませんが、やがて牛込見付の落馬騒ぎから、自分の長屋まで辿たどり付いた光景、着換きがえのために、暫く文箱を隣室に置きっ放しにしたことなどがはっきり思い出されます。

#### 四



「こう言う訳で御座います。御墨附おすみつきが出なければ、そうでなくてさえ公儀に睨まれてゐる大場家は明日とも言わず御取潰しになりました。御先祖大場甚内様、大坂夏冬の陣に抜群の御手柄あらを現わし東照宮様の御墨附を頂いたばかりに、この度御所領の騒動にも、格別の御沙汰もなく、御目こぼしになりました。——それにも拘かかわらず、大事の御墨附を失つては、御使者に立つた父相沢半之丞も生きてはいられません」

半之丞の娘お秀、涙ながらにこう語り進みました。

「——」

八千石の大旗本が、潰つぶれるか立つか、人の命幾つにも関かかわる事だけに、平次もお静も、八五郎も息も吐かずに神妙に聴入りました。

「父上は、主君への申訳、腹を切ろうとなさいましたが、腹搔はらき切かって出て来るといふ品では御座いません。——主君に申上げて、御驚きの中にも、三日だ

け猶予<sup>ゆうよ</sup>を頂きました。せめて三日、死ぬべき命を永らえ、恥じを忍んで御墨附の行方を探そうという覚悟を定めたので御座います」

「と申しても、どこに隠されたやら、誰が摺<sup>す</sup>り換えたやら、搔<sup>か</sup>暮<sup>い</sup>れ見<sup>み</sup>当<sup>あ</sup>も付きません。平次様、お助け下さいまし、外に頼るところもない親子、主従の難儀で御座います」

お秀はそう言ってしまったって、畳に手を突きました。血のような涙が、ポロポロと落ちて、その桃色珊瑚<sup>さんご</sup>を並べたような指を濡らします。

「お嬢様、お手をお上げなさいまし。御武家の内輪事へ、町方の御用聞や手先が口を出すべき筋では御座いませんが、お話を承<sup>う</sup>げ<sup>け</sup>たま<sup>わ</sup>います、思い切ってお引受け申しましょう」

きつと挙げた平次の秀麗<sup>おもて</sup>な面。

「え、それでは引受けて下さる、——何と御礼を申して宜しいやら」

お秀はもう涙です。

「あ、お嬢様、今からお礼は早過ぎます。ついては、これだけの事をお含みふく下さいませんか、私は町方の岡っ引ですから、どんな事があつても、御屋敷内の方を縛りはしません、三日の間出入りを自由にさして頂いた上、上は大場石見様から、下は馬丁べっとう、下女に至るまで、私の都合で、何時でも物を訊けるといふことに——」

「それはもう」

「それからもう一つ、この野郎は八五郎と申しまして、私には可愛くてならぬ子分ですが、御覧の通り人間は少し甘く出来ております」

「親分」

ガラツ八は横から口を出しました。人間が甘いと言われたのが不服だったの

でしよう。

「黙っている、——とところでお嬢様、今日一日この八五郎が親分で、あつしが子分になるといふ賭かけをいたしました。私の代りに、この男を差上げますから、私だと思つて、いろいろ御相談なすつて下さいまし、——大丈夫で御座いますとも、人間は甘くても、なかなか良い鼻を持つておりますから、どうかしたら、御墨附を嗅ぎ出すかも知れません。最初から私が乗出して、曲者に用心させるより、八の野郎を看板かんばんにして蔭あやつで繰あやつった方が、反つて仕事が運びます」

「——」

お秀は不安心そうにガラッ八を見やりました。鼻は良いかも知れませんが、どうもあまり賢かしこそうな人相ではありません。

## 五

即刻そつこく八五郎は牛込見付外の大場屋敷へ乗込みました。

八千石の旗本の用人といえ、小大名の家老にも匹敵ひつてきするでしょう。相沢半之丞の権力はたいしたもの、その住居も、お長屋という名に相応ふさわしからぬ堂々たるものです。

「父上様、平次の子分の八五郎という方を伴れて参りました」

「左様か、私は相沢半之丞じゃ、宜しく頼みますぞ」

四十恰好のデップリした武士、人品骨柄には申分ありませんが、恐ろしい心配に打ちひしがれて、さすがに顔色なまりが鉛のように沈んでおります。

「へエ——」

八五郎のつぶらな眼と長い顎あごが、すっかり半之丞を落胆させましたが、折角来たものを追いつ返すわけには参りません。

「どのようなにしても構わぬ、三日の間に御墨附を捜し出して貰いたい」

「へエ——」

八五郎は定石通り事件を遡上さかのぼって考えました。平次がこんな大事な舞台へ、代理として立たせてくれたのは、石原の利助や三輪の万七といった、意地の悪い岡っ引のいないところで、存分に腕を伸させるためでしょう。

「何など聞くがいい」と半之丞。

「それでは伺いますが、見付で落馬なすった時は、文箱はどうなりました」

「持っていた——が、生得馬が嫌いで、落馬も生れて始めてだから、大地に膝をついた時、思わず取り落した」

「拾い上げた時変ってはいませんかでしたか」

「いや、変る道理がない。眼の前で黒助が拾って、土埃つちほこりを払って渡してくれた

のだ」

「そこから歩いていらつしやるうちに、摺り換えられるような事は御座いませんか」

「そんな事はありませんか」

「お帰りになって、暫く隣の御部屋の机の上にお置きになったそうじゃ御座いませんか」

「着換のうち、暫く目を離したが、そこには召使の者が見張っていた」

「その方に逢わして頂けませんか」

「いいとも、これ、お組を呼んで来るがいい」

「ハイ」

お秀が立って行くと、入れ換かわって二十一の、召使とは見えぬ美しい女が入って来ました。

「お召で御座いましたか」

「この人が訊ききたいことがあるそうだ、何でも真まっ直ちぐにお答こたえするのだぞ」  
「ハイ」

静かに一礼して上げた顔は、その辺の商売人にも滅多めつたにない容色きりようで、髪形、  
銘仙の小袖、何となく唯の奉公人ではありません。

「この方は、御女中で御座いますか、旦那」

「フム、まず女中だ」

「まず女中とは？」

「家内に先年死に別れて、何彼と身の廻りの世話をさせている」

そう言えば立派めかけなお妾めかけです。八五郎は日本一のもっともらしい顔をして、この女を見据みぞえました。

「生れは？」



「房州の知行所の者だ」

と半之丞が引取りました。

「何時頃御奉公に上がりました」

「もう三年位になるかな、お組」

「ハイ」

「旦那、一々そう旦那が仰っしゃっちゃ何にもなりません。この御女中の口占くちうらから、いろいろの事を見付け出すのが、私の方の術てで」

「左様かな」

ガラッ八の半間な調子と、それを精一杯もつともらしくする言葉に、相沢半之丞も少しうんざりしております。

「ところで御女中、文箱はお前さんの目の前で摺すり換かえられた筈だ、この辺で何もかも申上げたらどうだ」

とガラツ八、思いの外突つ込んだ事を言います。

「えッ、そんな、そんな事は御座いません」

お組の顔はサツと血の氣を失いました。

「落馬した時に変わらず、道中で変らなければ、旦那が一寸眼を離した時、——  
お嬢様が御手伝いをして着換をしている時、隣の部屋でお前さんが摺り変える  
より外にvariようがないではないか。大事な時だ、よく考えて物を言った方が  
いいよ」

「——」

半之丞おやこ父娘も、そんな事を疑わないではありませんが、お組の愛おほに溺れた相

沢半之丞、さすがにそうと断定も出来ず、それを又齒痒はがゆいことに思つて娘のお

秀が、平次へ頼み込んだのでしよう。遠慮のないガラツ八にこう言われると、  
敷居際に聞いているお秀は、思わず唇を噛み、半之丞は今更ながら、取返し

付かない成行に、娘の視線を避けて首うな垂れました。

## 六

「どうだい、八親分」

「お願いだから、その『親分』だけは止しておくんなさい。殺生だよ、全く『ガラッ八』と言われた方が、まだしも清々する位のもので——」

帰って来た八五郎を迎えて、平次はこんな調子で話しかけました。

「それじゃ、ガラッ八親分」

「なお悪いや、——もう碁ごの相手は御免だ」

「気の弱いことを言うなよ、ところで首尾はどうだい」

「上々さ、自慢じゃねえが、あっしが乗込むと、一ぺんにカラクリが解ってし

まいましたよ、親分」

「大層鼻がいいね、曲者ほしは見当だけでも付いたのかえ」

「見当は心細いな、動きのとれないところを押えて、白状させるばかりに運んで来ましたぜ」

「へエ——、少し可怪おかしいぜ、八」

「こう言うわけでき、相沢半之丞は三年前に配偶つれあいに死なれて、それから知行所から呼んだ下女のお組というのを妾めかけにしていた。——これは大変な美しい女だが、お嬢さんと折合が悪いので、近いうちに縁を切って、田舎へ帰すことになっていきますぜ」

「成程」

「文箱を一寸の間見張っていたのは、間違いもなく、その女だから、誰が考えたって曲者はお組に極ひまっているようなものでさ。手落も罪もなくして暇ひまになる腹

いせに、ちよいとそんな悪戯わるさをしたが、相手が父親の妾だけに、判りきつていても、お秀さんとかいうお嬢さんの口からは騒ぎ出せない。わざわざ平次親分を引張り出して判り切った曲者ほしを挙げさせようとしたのは、そんなわけですよ」  
八五郎は少ししたり顔でした。成程、それだけの話なら、平次を引張り出す迄もなく、ガラツ八でも事は済みます。

「ところで、そのお墨附すみつきというのは見付かったのかい」と平次。

「それが判らないから不思議だ、御墨附が見付かるどころか、どんなに責めても、お組というお妾は知らぬ存ぜぬの一点張だ。ね親分、女というものは、思ったより剛情なものじゃありませんか。顔を見ると、そんな大それた事をしそうもないが」

「もう一つ訊くが、文箱は念入りに検しらべたろうな」

「見ましたとも」

「塗ぬりか紐ひもに汚れはなかったかい、土か砂の付いた跡が——」

「そんなものはありやしません、舐なめたように綺麗でしたよ」

「フォーム」

「落馬した時持っていた箱なら、往来へ取落したと言うから少し位拭いたって、泥か埃が付いている筈でしょう。——だから家へ持って帰ってから摺り換えられたに間違いありません」

ガラツ八も見よう見真似でなかなか穿うがつたことを言います。

「八」

「へエ」

「これは、思ったより底のある企たくらみらしいぜ、もう少し様子を見るとしよう」  
平次は考え深そうに腕こまぬを拱こまぬきました。

「底にも蓋ふたにも、これっきりの話じゃありませんか」

「いや、そうじゃない。お前は駄目ばかり詰めて、肝腎かんじんの筋へは石を打たなかつたんだ」

「へエ、譬たとえが碁と来たね」

「俺はこれから、ちよいと行って見てくる。用事があつたら牛込見付の辺へ来て見るがいい」

もう夕暮に近い街へ、平次は大急ぎに飛出しました。

それから一刻ばかり、秋の日はすっかり暮れて、ガラッ八が所在もなく鼻毛を抜いていると、牛込の大場石見邸から、

「即刻、平次親分に来てくれるように」

と言う丁寧な口上で使つかいの者が来ました。

「弱つたなア、親分はどこへ行ったか解りませんが、その辺まで行って見ましょ

う。牛込見付のあたりにいるかもわかりませんから」

ガラツ八はそう言いながら使いの者と一緒に、神田から九段下に出て牛込見付へやって来ました。

八日月の薄明り、幸い人の影は五間十間離れても見当位付きます。

「親分」

ガラツ八は月の光にすかして声を掛けると、濠端の柳の幹みきから離れた影が、

「八か、何だ用事は」

紛まぎれもなく平次の声です。

「大場様から、すぐ来るようになって、御使の方が見えましてぞ」

「そうだろう」

「あれ、待っていたんですかい」

「まア、ね」



平次はそう言つて、何やら手に持った物を懐に入れながら近づきました。

## 七

通されたのは、相沢半之丞の長屋ではなく、本家の大場石見の奥座敷、といつても、庭木戸から廻つて、縁側にかしこまった平次とガラツ八は、四方あたりの様子物々しさに、思わずギョツとしました。

庭先に番手桶ぼんておけ、荒筵あらむしろを敷いて、その上の枝ぶりの良い松に吊り上げたのは、半裸体の美女。言うまでもなく用人相沢半之丞の妾お組がんじというのが、雁字がんじがらめにされて、水をブツかけられたり、弓の折れで打たれたり、芝居せめの責せめをその儘しごもんの拷問しごもんにかけられているのです。

「平次か」

縁側に立ったのは、大場石見、八千石の当主でしょう。五十を少し越した筋張った神経質な武家、一刀を提げて、松が枝のお組と、縁先の平次を当分に見比べた姿は、苛斂誅求で、長い間房州の知行所の百姓を泣かせた疖癬は十分に窺われます。

「へエ」

「用人相沢半之丞から何もかも聞いた。この女を申受けて、あらゆる責めようをして見たが、剛情我慢で何んとしても言わぬ。命を絶つのは易いが、それでは御墨附の行方も永久に解るまいと言うので、取りあえず其方を呼びにやったのだ。商売商売で、かような女に口を開かせる術もあるう、何とか致してくれ」

「大場家の大事だ。首尾よく御墨附の在所が判れば、礼は存分に取らせる」

何という嫌な言い草でしょう。平次は疔かんの虫がムカムカと首をもたげましたが、八千石の大身の興廢に拘ることと、胸をさすって唇を噛みました。

「どうじゃな、平次」

「拷問ごうもんや牢問ろうといは、牢番与力配下の不浄役人の仕事で、手前共手先御用聞の役目では御座いませぬ、恐れながらその儀は御容赦を願います」

平次は屹きつと言ひ切りました。沓脱くつぬぎの上にくそ膝を突きましたが、挙げた面魂つらだましいは、寸毫すんごうも引きそうになかったのです。

「フーム、そうか、なかなか立派な口をきくのう。が、大場かかわの家の浮沈うきしんに關ることじゃ、捨て置くわけには参らぬ。半之丞、打って打って打ち据えいッ、黒助は水を掛けるのだ」

「ハッ」

名馬罪あり

馬丁べつとらうの黒助は立ち上がって、番手桶の水をザブリと掛けました。初秋の肌寒

い風が、半裸の美女を吹いて、そのままくんじょう燻蒸する湯気も匂いそうです。

「半之丞、打てッ」

「ハッ」

相沢半之丞、弓の折れを取って立上がると、三年越ちようあい寵愛した自分の妾の肉塊しむらを、ピシリ、ピシリと叩きます。

「あッ」

キリキリと空に廻るお組の身体は、一塊の綿を束つかねたように、絶え入るばかりもがき苦しみます。

「まだ言わぬか、女」

堪え兼ねて大場石見、一刀を提げたまま庭に降り立ちました。

「殿様、お怨うらみを申します」

「何？」

不意に、縛られた女の声を聞くと、大場石見は愕然がくぜんとして振り仰ぎました。  
「永い間の非道ななされ方の酬むくいとは思いませんか。年々の不作も構わず、無法な御用金を仰せ付けた上、厭が上の徴税とりたてに、知行所の百姓は食うや食わずに暮しております」

「何、何を言う」

「親は子を売り、夫は女房に別れて、泣かない日とてはない何千人の怨み、公儀の御とがめは免まぬがれても、御墨附が紛失した上は、軽かくて改易かいえき、重ければ腹でも切らなければなりませんまい、おおい気味」

縛られた美女、月光に人魚のように光るのが、カラカラと血潮に酔ったような笑い声を立てるのでした。

「お前は何だ」

「房州の百姓の娘、殿様に近うらみ付いて怨むくを報むくいたばかりに、相沢様に入むくり込んで、

心にもない機嫌きげん気き褻せつを取りました。相沢様は用人としてするだけの事は、それも内輪にただけ、罪は十が十まで殿様の我儘と贅沢にあることが解りました。御墨附は私が死ねば、どこにあるか知ってる者もない筈、せめて腹でも切って、多勢の百姓の怨を思い知るがいい、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ

高鳴るちやうしょう嘲笑しょう。

「お組、それは考え違いだぞ。殿様にはよく申上げて、くれぐれも上納を軽くして頂く、御墨附の在所ありかを言えッ」

と相沢半之丞、思わず立ち上がって、松が枝に吊つるした縄に取りすがりました。

「誰が言うものか、見るがいい、この邸にペンペン草を生やしてやるから」

「お組ッ」

黒助と石見が一団になって駆け付けましたが、縛られたまま舌でも切ったものか、吊られた縄がキリキリと廻ると、お組の蒼白い唇からはクワツと血潮が

流れます。

八

「平次、何とかならぬものか。お組が死んでしまつては、開かせる口もないが、御墨附がなくては大場の御家は断絶だ」

「――」

「約束の三日目は過ぎて、今日はもう七日目ではないか。何とかして捜し出す工夫はないものだろうか。まさかお組は、焼きも捨てました筈はない。八五郎とか言うのが気が付くと、直ぐ取つて押えて、間もなく主君へ申上げたのだから、御墨附を始末する暇はなかつた筈だ」

相沢半之丞、折入つて平次に頼み込みました。お組が死んで七日目、これ以

上愚凶愚凶して、公儀の耳にでも入っては、全くどうすることも出来なかつたのでしよう。

「御胸の中は御察し申しております」

「それでは何とかしてくれぬか。拙者も腹を切るにも切られぬ羽目だ」

半之丞は思わず吐息といきを吐つきました。主君大場石見の暴圧を永年の間どれだけ緩和して来たことか、この人には、お組が言ったように、決して悪意のないことを平次も知り悉つくしていたのです。

「旦那、私にはよく解っております」

「何が」

「御墨附は焼きも捨てもしませんが、この儘では決して出っこはありません」

「どうすればいいのだ」

「お人払いを願います」



平次の物々しい様子に、半之丞は立って縁側と隣の部屋を覗きました。

「誰も聞いてはおらぬ」

「御墨附を手に入れるには、大場石見様いわみが隠居を遊ばして、御家督を先代様の御嫡男ごちやくなん、今は別居していらつしやる、大場采女様うねめにお譲りになる外は御座いません」

「えッ」

平次は大変な事を言い出しました。

「長い間の無法な御政治で、御領地の百姓が命を捨ててお怨みうらみしようと思っております。このままにして置いては、百人千人のお組が出て来ることは、解り切ったことで御座いましょう」

「フーム」

「御当主石見様は、先代の御遺言ゆいじん通りに遊ばせば、三年も前に二十歳はたちになられ

た甥おいの采女様に御家督かどくを譲ゆずらなければなりません。私は七日がかりでこれだけの事を調べて参りました」

「この儘に時が経てば、御城の目安箱から、大場家御墨附紛失の届が出て来ましよう。一と月とたたないうちに、御家は御取潰しになります」

「殿様——石見様は一日も早く御隠居遊ばして、本当の御跡取、采女様を家督に直すよう、呉々も御すすめ申上げます。それさえ運べば、憚はばかりながら、御墨附はその日のうちに私が捜して参ります」

平次の言葉には、妥協たきようも駆引もありませんでした。大場家を潰つぶすか、石見が隠居するか、この二つより外には道がありそうもなかったのです。

「旦那様、大事な場合で御座います。後見人から御当主に直られた石見様の悪

業のために、大場の御家を潰してはなりません」

重ねて言う平次の言葉に、相沢半之丞も漸ようやくうなずいた様子です。

## 九

事件は一挙に片附いてしまいました。翌る日親類が寄合い、相沢半之丞と平次が説明役になって、家のため、諸人のため、評判の悪い大場石見は隠居する事に決り、すぐさま公儀とどけずに届済みになって、本当ちやくなんの嫡男、先代の子采女うねめが入つて家督相続をしました。

が、まだ御墨附が出て来ません。

采女が登城して、首尾よく御目見得を済ませた晩、大場家の奥には、采女と

相沢半之丞と平次が首を鳩あつめておりました。

「平次、もう御墨附を捜してもらえらるだろうな、それを機しおに拙者も身を退きた  
い」

自分の粗忽からこの騒動を惹起ひきおこしたと思込んでいる半之丞は、心の底からそ  
う言うのでした。

「私も今晚あたりは、御墨附をお返し申上げられるかと思ひます。恐れ入りま  
すが、馬丁べつとうの黒助を御呼び下さいますように」

妙な注文ですが、半之丞はすぐ人をやって、黒助を庭先へ呼び寄せました。

「黒助に何か用事か」

若い采女うねめは、平次の物々しさが、すっかり気に入ったようです。

「兄哥あにい、お前の望みは遂げた筈だ。大場の御家を取潰す迄もあるまい。この辺  
で御墨附を出したらどうだ」

ズイと出た平次、縁側の下に蹲うづくまる黒助を見下ろしてこう言うのでした。  
「えッ、そりや親分」

黒助はギョツとして顔を上げました。二十四五のよい若い者、黒助という名とは似も付かぬ色白で、身のこなしも何となく尋常ではありません。

「よく知っているよ、なア、黒助兄哥、お前さんの父とつさんは御用金が嵩かさんだ上、上納とじこおが滞とって水牢で死んだ筈だ。兄妹二人、この怨みを晴らしたさに、お前さんは馬丁になって、嚴重な大場様の屋敷に入り込み、妹のお組は下女になって、用人の相沢様に奉公したが、容貌きりようのよいのが幸か不幸か、到頭側近くお世話することになった。これだけの事を知りたさに俺は房州まで行って来たよ」

「――」  
黒助はガツクリ首を垂れました。平次の言う事が凶星をピタリと言い当てたのでしよう。

「相沢様が御墨附を受取に行った時、千載一遇の思いだったろう。お前は前の晩用意をしろと言いつけられると、早速青竹を切つて来て水鉄砲を拵えた、これだよ」

平次はそう言つて袖の中から七八寸の青竹、節のところに小さい穴をあけて綿を巻いた棹を突込んだ、一番原始的な水鉄砲を出して見せました。

「――」  
黒助は素より、采女も半之丞も、あまりの事に言葉もなく互に顔を見合せるばかりです。

「馬は耳へ水を入れられると死ぬ、お前は折を狙つて『東雲』の耳に水を入れ、馬のお上手でない相沢様を落馬させて、御墨附の文箱を摺り換えるつもりだったろう。――うまい折がなくて、牛込見付まで来ると、丁度引越車が通りかかった。お前は法被を馬に被せて、その下で水鉄砲の水を耳に注ぎ込み、思惑どお

り氣違ひのようになった馬から、相沢様が落ちるところを狙<sup>ねら</sup>つて、予<sup>かね</sup>て用意した文箱を摺り換えたろう。俺には目に見えるように解る」

「子分の八五郎を相沢様の御長屋へやって、俺は馬の荒れた場所へ行<sup>い</sup>つて見た。見当を付けた土手<sup>どて</sup>の下に、この水鉄砲を見付けるのは何んでもないことだったよ」

「妹のお組は、兄の仕業<sup>しわざ</sup>と覚<sup>さと</sup>つて、文箱の泥を丁寧<sup>ていねい</sup>に拭き取り、罪を自分一身に引受けて死んだのは見上げた心がけだ。気が付けば殺すんじゃないが、縛られたまま舌を噛まれたので、手の付けようがなかった」

何という明智でしょう。こう説き明かされると、もう寸毫<sup>すんごう</sup>の疑いも残りません。

「俺はこの手で妹へ水をブツ掛けさせられた。畜生、殺しても飽足あきたらないのはあの石見いわみだ」

黒助はキリキリと齒を噛み締めて、いつぞや、妹が吊られた松が枝を、一月遅れの月の光に見上げました。

「黒助兄哥あにい、怨みのある石見様は隠居した上、御親類中から爪弾つまはじきされて、行方不明になってしまった。敵は討つたも同じことだろう。この後は采女うねめ様が乗出して、御政治向きもよくなる——、お前の故郷では盆と正月が一緒に来たような騒ぎだ。妹のお組の骨を持って、早く帰るがいい」

「平次、御墨附は」と相沢半之丞。

「へエ、これがその御墨附で御座います」

次の間の縁側から、ガラツ八の八五郎が、黒塗金蒔絵くろぬりきんまきえの立派な文箱、高々と



結んだ紐まで以前のままのを捧げて、お能のうの足取りといった調子で来たのでした。

「あッ、それは」

「黒助兄哥、濟まねえが馬糧まぐさの中を探さしたよ、——それから、相沢様、黒助には給金の残りも御座いましょう。五十両ばかり持たして、故郷へ歸してやっておくんなさいまし」

「——」

何おうちやくという横着さ、半之丞あきが呆れて黙っていると、若い采女は手文庫てもんくの中から二十五両包を二つ出してポンと投ほうりました。

「お組の墓でも建ててやれ」

黒助は黙ってうなずきました。この若くて艱難をした新領主たてに楯たてを突く心は微塵みじんもなくなっていたのです。

「親分、鮮やかだったね、水鉄砲を袂から出した時は、音羽屋アと言いたかったよ」

「お前が文箱を捧げて出た足取りもよかったよ、ハッハッハッハッ、この勝負は中押で俺の勝さ」

「違えねえ」

平次と八五郎は、月明りの下を、ホロ酔加減で神田へ辿っておりまして。家には、美しいお静が寝もやらずに持っているのです。

相沢半之丞は惜まれながら身を引き、娘のお秀は玉の輿に乗って、主君大場采女と祝言しました。これはズツと後の話、馬丁の黒助は本名の九郎助に返って、房州で百姓をした事は申す迄ありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和八年十月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第一卷 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

名馬罪あり



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>